



薬学部だより

薬学部

徳島大学薬学部
July 2021

Vol.28

Faculty of Pharmaceutical Sciences, Tokushima University

巻頭言

■ 夢はエネルギー



徳島大学薬学部長

土屋浩一郎

Tsuchiya Koichiro

令和3年4月1日より、佐野茂樹前学部長の後任として薬学部長を拝命いたしました。甚だ微力ではございますが、薬学部長、大学院薬科学教育部長、医歯薬学研究部副研究部長（薬学域）として、徳島大学薬学部の発展に尽力する所存です。よろしくお願いいたします。

さて、令和3年度の薬学部では入学の段階で大きな変更がありました。私自身本学部の出身で、今から38年前の入学時は薬学科と製薬化学科（平成18年度からは創製薬科学科に改称）の2学科で構成されておりましたが両学科の違いは僅かで、卒業時には半数以上製薬企業に就職して創薬に関わる事が当時の雰囲気でした。その後、薬剤師養成のための就学年数が6年となった平成18年度から平成29年度までは両学科一括入試で募集し3年次に学科分けを行う方式に移行し、さらに平成30年度からは2学科分割入試になりました。この期間中も徳島大学薬

学部は創薬指向の考え方を維持しつつ、新しい理念を「インタラクティブ YAKUGAKUJIN」（薬学が関係する諸分野の連携を基盤に、自らの活躍の場を積極的に開拓できる能力に溢れた人材）の育成と定め、博士の学位を有した創薬研究者はもとより、学位と薬剤師免許の両方を有する人材の育成を進めてきました。

ところで最近の日本の薬学を取り巻く状況を見ると、厚生労働省が発表した薬剤師需給予測では数の上で薬剤師過剰時代の到来が現実になっていますが、基礎から臨床までの俯瞰力に富み研究実践能力を備えた薬剤師や薬学研究者、いわゆる Pharmacist-Scientist の点では将来にわたり不足することが懸念されています。特に6年制が導入されたことにより学位を有する薬剤師数が極端に減ったことで将来の薬学部を担う人材不足が強く危惧されるようになりました。そのような中で徳島大学薬学部の進むべき方向について議論を重ねた結果、令和3年度の入学生からは「薬の創製（創薬）をめざす」という、徳島大学薬学部創設の精神に立脚し、医療の現場からの問題点を医薬品創製・開発に結びつける先導的人材の育成を強力に推進するには現在の創製薬科学科の（研究）部分を薬学科に融合し、徳島大学薬学部の強みである創薬の伝統と、蔵本キャンパスという医学部・歯学部・大学病院等の立地条件を最大限活用することで先導的薬学研究者（医療を理解する薬学研究者）を育成すべきという結論に達しました。具体的には薬学に対する興味を

持っている薬学部入学直後から創薬や研究に触れる授業、および研究室での研究体験を取り入れることにより、これから徳島大学薬学部で過ごす時間の中で夢と目標を見つけてもらうことを始めています。勿論、令和3年度からの新入生だけでなく在学生についても同様の取り組みを通じて徳島大学を Pharmacist-Scientist の拠点にするべく、教職員一同取り組んでいるところです。

さて、徳島大学薬学部は大正11年（1922年）に、日本の薬学の開祖と言われている長井長義博士の進言により徳島高等工業学校応用化学科に薬の創製を目的として設立された、我が国唯一の工学系に端を発する国立大学薬学部で、2023年に100年の節目を迎えます。この慶事を迎えるにあたり、薬学部の同窓会組織である薬友会と協力し、100周年記念式典を開催する方向で検討を始めました。皆様のご支援・ご協力をお願いする事になりますが、この場をお借りしてご報告申し上げます。

最後に、一昨年度から発生した新型コロナウイルス感染症のために大学の活動も大きな影響を受け、また、講義や課外活動、研究活動、部活やサークルにも大きな支障が出ています。このような困難な時期ですが、徳島大学薬学部に集う皆様におかれましては制約のある中で今できることを見つけ、ポストコロナ時代を見据えて歩みを止めること無く夢をエネルギーとして前進してもらいたいと強く希望する次第です。

創製薬科学科長・創製薬科学研究者育成コース長より



創製薬科学科長
創製薬科学研究者育成コース長

小暮健太郎

Kogure Kentaro

創 製薬科学科長を拝命し、創製薬科学研究者育成コース長を兼任することになった小暮健太郎です。新入生の皆さん、ご入学おめでとうございます。本年度入学生より、徳島大学薬学部は6年制薬学科のみとなりましたが、徳島大学薬学部の使命である創

薬研究者の育成のために創設されたのが、創製薬科学研究者育成コースです。このコースは、「医療を理解し、創薬・製薬に貢献できる薬学研究者・教育者を育成する」ことを目的としています。定員は30名ですが、学校推薦型選抜Ⅱによって入学された5名はコースが確定しています。残りの25名は、3年生進級時にコース決定を行います。創製薬科学研究者育成コースは、創薬研究者育成のために「学術論文作成法」や「創薬実践道場」「英語プレゼン実践講座」など、コース独自のユニークな科目を設けています。もう一つの先導的薬剤師育成コース同様に、高学年において共用試験（OSCE/CBT）を受験し、合格した後に学外実務実習を行うことで、薬剤師国家試験受験資格を得ます。従来の薬学科学学生と異なるのが、共用試験および学外実務実習の実施時期です。創製薬科学研

究者育成コースでは、3年生進級時に研究室配属されてから5年生後期まで卒業研究に打ち込むことができます。共用試験は、5年生後期に受験し、6年生で学外実務実習を実施することになります。そのため、従来の薬学科学学生よりも、より長い期間研究を継続して実施することができるようになっていきます。今年度スタートしたばかりですから初めての試みが多いため、いろいろな課題も出てくるかもしれませんが、入学された皆さんに不利益になることが無いよう、薬学部事務課の方々とも協力して進めていきたいと思えます。ほとんどの新入生の皆さんは、2年後にコース・プログラムを選択することになりますが、1・2年生の間に様々な経験を積み多くの知識を得ることのできる自分を見つけてください。

薬学科長・先導的薬剤師育成コース長より



薬学科長
先導的薬剤師育成コース長

石田 竜弘

Ishida Tatsuhiko

薬 学科長を拝命し、先導的薬剤師育成コース長を兼任する石田竜弘です。教務委員長も兼任していますので、新入生の皆さん、在校生の皆さんには顔なじみかと思えます。本年度入学生より、徳島大学薬学部は高度な基礎力の涵養と多彩な進路選択が

可能な「薬剤師資格を基盤とする薬学部新6年制課程」に移行し、薬学部の理念である「インタラクティブ YAKUGAKUJIN」の養成を強力に押し進めることになりました。高度な研究や先端的な治療法がわかり、リーダーとして活躍できる薬剤師の輩出を目指し設置されたのが「先導的薬剤師育成コース（定員50名）」です。また、このコースは、研究実践能力を備えた薬剤師として先進医療分野に創造的な取組ができる人材の育成を目指した「研究型高度医療薬剤師プログラム（定員40名）」と、研究実践能力を備えた薬剤師として地域医療分野に創造的な取組ができる人材の育成を目指した「研究型高度医療薬剤師プログラム（定員10名（学校推薦型選抜Ⅱ合格者5名含む）」の2つのプログラムからなっています。学校推薦型選抜Ⅱで入学した5名はプログラムが確定しています

が、残りの45名は3年生進級時にコース決定を行います。昨今の科学技術の進歩はすさまじく、CAR-T療法など細胞自体が医薬品として用いられ、コロナワクチンのように-80℃で流通される製剤が登場しています。また、リモートでの服薬指導、在宅訪問など、薬剤師の業務も大きく変化してきています。そういったドラステックな変化に対応でき、グローバルな観点でも、ローカルな観点でも、我が国の医療の向上のためにリーダーシップを発揮できる人材の養成と輩出を目指していきます。ほとんどの1年生は、3年次進級時にコースおよびプログラムを主体的に選択することになります。選択に役立つ多彩かつ徳島大学薬学部にて特徴的な講義や実習を用意していますので、主体的に取り組み、今後の進路を選択していただきたいと思います。

研究紹介

■ 天然物合成の力で飢餓の無い世界を実現する



有機合成薬学分野 教授

難波 康祐

Namba Kosuke

当研究室では複雑な高次構造を有する天然有機化合物の全合成研究を主たる研究課題として日々研究に励んでいます。天然物を化学合成して何になるの?と思う方もおられるかもしれませんが、天然物はその利用法によっては世の中を大きく変える可能性を秘めています。本稿では、現在我々が取り組んでいる天然物を基にした革新的な物質創製について紹介します。

地球の人口は増加の一途を辿っており、2050年にはついに100億人に達すると予測されています。このため、世界の食糧生産が人口増加に追いつかず、近い将来には深刻な食糧危機に直面することが懸念されています。しかしながら、森林伐採による農地拡大は地球温暖化の悪化という更なる問題を引き起こします。そこで我々は、世界の陸地のおよそ1/3を占めるアルカリ性の不良土壌の活用に着目しました。アルカリ性不良土壌は乾燥地帯に多い沙漠土壌であり、通常の植物は生育が困難です。これは、アルカリ性土壌では鉄イオンが水に溶けない水酸化鉄となっているために、植物は根から鉄イオンを吸収できず鉄欠乏症を引き起こすためです。

この不溶性鉄の問題に対し、イネ科植物は進化の過程で効率的な鉄イオン吸収メカニズムを獲得してきました。すなわち、イネ科植物は根からムギ

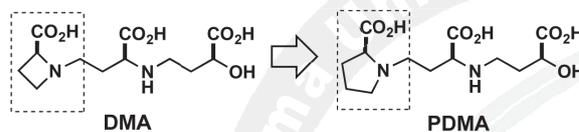
ネ酸類 (MAs) と呼ばれる鉄キレート剤を分泌し、土壌中の鉄イオンと錯体を形成することで鉄イオンを可溶化します。このムギネ酸・鉄錯体をトランスポーターを介して体内に取り込みます。しかしながら、このムギネ酸類の分泌量はイネやトウモロコシなどの穀物では十分ではなく、アルカリ性不良土壌での穀物栽培は困難でした。

そこで我々は、イネやトウモロコシが分泌する 2'-デオキシムギネ酸 (DMA) を肥料としてイネの培地に加えてやれば、イネの低分泌量を補うことが可能と考えました。これは非常にシンプルなアプローチですが、この研究を始めた当初は誰もが DMA の実用化は不可能だと思っていたことでしょう。何故ならば、DMA の市販価格は 1 mg で約10万円とべらぼうに高いからです (1 mg で10万円もする化合物を誰が畑にまくのでしょうか?)。そこで、全合成が専門分野の私達は DMA の効率的な合成法を確立すると共に、DMA の4員環の部分を変更に誘導体 (PDMA) を開発しました。これらの化合物の成長促進活性を愛知製鋼株式会社で評価していただいたところ、予想したとおり DMA にはアルカリ性不良土壌でイ

ネの鉄欠乏症を回復させる効果がありました。また驚いたことに、安価誘導体の PDMA は天然の DMA の10倍以上の成長促進活性を示すことが分かりました。これは、4員環の歪みが5員環になることによつて解消され、

土壌での安定性が増したことが要因と考えています。さらに、原料となるアミノ酸を5員環に変更したことで、合成コストを約1/10000まで削減できました。コストの問題を解決できたことから、石川県立大学で実際のアルカリ性不良土壌の圃場を作成し、PDMA の効果を検証しました。その結果、PDMA を投与しなかった圃場ではイネは生育できませんでしたが、PDMA を投与した圃場では沙漠の土壌でもイネは正常に生育し、問題なくコメを収穫することができました。すなわち、沙漠の土でお米が収穫できたこととなります。収穫したコメを食べてみたところ、甘くて美味しいお米でした。

以上の PDMA の成果は2021年3月に *Nature Communication* に掲載され、NHK のニュース報道や NHK の特集で紹介されたほか、日本経済新聞全国版をはじめとした多数の新聞記事および「月刊化学」や「子供の科学」といった雑誌などでも紹介され、幅広い年代層から大きな反響を得ました。いずれは PDMA を世界各地に提供することで飢餓の無い豊かな社会を実現したいと願い、学生・共同研究者の皆様と共に日夜研究に励んでいます。



国際交流

■ UNCエシェルマン薬学部とのビデオカンファレンスの実施



臨床薬学実務教育学分野 教授

阿部 真治

Abe Shinji

現在の医療はグローバル化が進んでおり、国際的な視点を有した薬剤師の養成が求められています。以前は海外留学を経験することでグローバルな考え方を育むことが可能でしたが、新型コロナウイルス感染症の影響で海外への渡航は大きく制限されており、学生時代に留学を経験することは

困難な時代となっています。しかし、徳島大学薬学部では2010年度より学部間学術交流協定校である米国ノースカロライナ大学（UNC）エシェルマン薬学部の Dennis Williams 准教授と共同で、希望学生を対象とした症例検討ビデオカンファレンスを実施しており、学内にいながら国際的な視点を身につける取り組みを継続して行っています。2020年度もこれまでと同様に本プログラムを実施いたしました。このプログラムでは両校の薬学部学生がWEB会議システムを利用し、事前に提示した共通症例の薬物療法について英語によるディスカッションを行います。2020年度は2021年1月から3月にかけて、土屋浩一郎 教授と佐藤智恵美 助教の協力のもと、3～5年次学生および大学院生28名が参加して合計3回の症例検討ビデオカンファレンスを実施しました。本プログラム

では、高度な症例検討能力が求められるとともに、それを英語でやり取りする必要があるため、参加者は最初、意思の疎通に苦労していました。しかし、回を重ねるごとに充実したディスカッションとなり、両校の学生にとって日米における医療制度や薬学教育の相違点はもちろん、それぞれの国の新型コロナウイルス感染症対応の現状について知る良い機会になりました。今後も本プログラムを継続し、新型コロナウイルスの感染状況に関係なく、グローバルな視点を有した人材養成に努めてまいります。



iTEXシンポジウム（薬学部若手教員発表会）のご報告



薬物動態制御学分野 特任助教

清水 太郎

Shimizu Taro

本薬学部では、文部科学省概算要求事業の一環として、「多機能性人工エクソソーム（iTEX）医薬品化実践を通じた操薬人育成事業」を推進しています。本事業は、研究を通して分野横断型の操薬人を育成することを目的としており、種々の研究・教育活動を支援しております。

例年、1年間の総まとめとして、薬学部内の若手教員および学外の著名な

先生をお招きし iTEX シンポジウムを開催しておりました。しかし本年度は、新型コロナウイルス感染拡大の影響で学外の先生をお招きすることが難しく、薬学部の若手教員8名（敬称略：安藤、伊藤、稲垣、猪熊、清水、傳田、福島、福田）による教員発表会を開催しました（2021年1月27日、長井記念ホール）。

各教員による発表は、エクソソームに関連したものだけでなく、化学、生物、物理の各分野から最新の研究成果の発表が行われ、よい異分野交流の場となりました。コロナ渦の影響で学会発表がなかなかできない状況下だったため、若手教員にとって良い刺激となりました。それは学生にとっても同様であり、質疑応答時には教員だけでなく、学生からの積極的な質問が飛び交い、学会さながらの熱気でした。中には研究室配属前の2年生の学生も参加しており、普段の授業とは異なる最新の研究に触れる機会になったのではな

いかと思います。参加者は総勢125名（学部生69名、大学院生33名、教職員23名）におよび盛会のうちに終了しました。

本事業内容の詳細や得られた成果については薬学部 HP (<https://www.tokushima-u.ac.jp/ph/faculty/labomarch/iTEX/>) に掲載しています。是非ご覧ください。



シンポジウム発表の様子



質疑応答の様子

新任教員挨拶



衛生薬学分野 助教

大園 瑞音

Ozono Mizune

令和3年4月1日より、福田達也助教（現 和歌山県立医科大学薬学部 講師）の後任として、徳島大学大学院医歯薬学研究部 衛生薬学分野（小暮健太郎教授）の助教に着任いたしました大園瑞音と申します。私は徳島大学薬学部創製薬科学科を卒業後、同学大学院薬科学教育部に進学し、大学在学中はミトコンドリアに存在するタンパク質に着目した構造や機能の解析を主とした研究に従事しておりました。昨年9月に博士後期課程を修了し、本学生物薬品化学分野（篠原康雄教授）にて博士（薬科学）の学位を取得しました。令和3年2月に行われた第106回薬剤師国家試験にて薬剤師

免許を取得し、この度ご縁があつて衛生薬学分野での研究・教育に従事させていただくことになりました。慣れ親しんだ徳島で引き続き研究生活を送らせていただける喜びを感じている一方で、学生の頃とは全く異なる環境・生活に日々責任を感じております。今年度の1年生から、徳島大学薬学部のカリキュラムは大きく変わりました。微力ではございますが、学生時代より目標としていた研究マインドをもった薬剤師の育成に少しでも貢献できるよう尽力する所存です。今後ともご指導・ご鞭撻を賜りますようよろしくお願い申し上げます。



医薬品病態生化学分野 助教

片山 将一

Katayama Shoichi

令和3年5月1日付けで、大学院医歯薬研究部、医薬品病態生化学分野（山崎哲男 教授）に助教として着任いたしました片山将一と申します。私は香川大学農学部を卒業後、愛媛大学連合農学研究科において精神・神経疾患に関わるタンパク質リン酸化酵素の解析に従事してまいりました。学位（農学）を取得後は立命館大学薬学部にて助教として勤めてまいりました。このたび、ご縁がありまして本学に着任させて頂くことになり、大きな喜びと責任を感じております。本学で

は、これまでに研究対象としてきたタンパク質リン酸化酵素に加え、精神・神経疾患の原因となりうる様々なタンパク質の生化学的・分子生物学的解析を幅広く行い、疾患の原因解明、治療法の探索に取り組む所存です。私は薬学部出身者ではありませんが、薬学教育に従事したこれまでの経験を活かし、本学の薬学教育・研究に貢献できるよう精一杯取り組む所存です。どうか皆様のご指導、ご鞭撻のほど何卒よろしくお願い申し上げます。

退任教員挨拶



衛生薬学分野 助教

福田 達也

Fukuta Tatsuya

2021年3月をもちまして徳島大学を退職し、4月より和歌山県立医科大学薬学部薬剤学研究室講師に着任致しました。在職中大変お世話になりました先生方、事務職員の皆様、学生の皆様に御礼申し上げます。特に、衛生薬学分野の小暮健太郎教授には、研究・教育に関して熱心なご指導を賜り、多くのことを学ばせて頂いたこと、誠に感謝申し上げます。秋田出身で、大学を静岡で過ごしていた私が、大学院生時代に小暮先生とお会いしたことをきっかけとして、徳島大学の小暮先生の研究室で助教の職を頂けることになるとは当時全く想像してお

らず、また衛生薬学分野の学生と研究室生活を過ごせたことに縁の素晴らしさを感じるとともに、大変貴重な経験をさせて頂きました。また、若手の先生方には、新任の頃から様々なことを教えて頂き、定期的な勉強会などで沢山の刺激を頂きましたこと、本当にありがとうございました。新設の薬学部で一からのスタートを切ることとなりますが、徳島大学で学んだこと、得た経験を活かし、新しい環境で飛躍できるよう精進する所存です。今後とも変わらぬご指導ご鞭撻のほど、何卒宜しくお願い申し上げます。4年間、本当にお世話になりました。

令和2年度薬学部・薬科学教育部各賞授与式の開催について

令和3年3月23日、薬学部長井記念ホールにて、「令和2年度薬学部・薬科学教育部各賞授与式」が、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、出席人数制限などの対策を行い、執り行われました。

佐野学部長より「みなさんは「焦らず、慌てず、諦めず」の精神で自らの目標をしっかりと見据え、自分のペースで歩み続けてください。『Why Not the Best?』と自問しながらベストを尽くしてください。何事にも感謝の気持ち忘れずに、それぞれの新しい未

来を切り開いていかれることを心より願っています。」とお祝いの言葉が述べられました。

続いて、「長井賞」と副賞の時計が、卒業成績優秀な学生として薬学科・森崎実友さんと創製薬科学科・光村豊さんに、授与されました。また、「学生発表奨励賞」と副賞の図書カードが、日本薬学会中国四国支部から、同学会での研究発表内容の優秀な学生として、薬学科・武井みのりさんと、博士前期課程・城裕己さんに贈られ、最後に「学部長特別表彰」と副賞の図書

カードが、実務実習成績発表優秀ポスター賞として薬学科・多田篤史さんと又吉かれんさん、森崎実友さん、それぞれ学生に授与されました。なお、欠席の上殿千春さんと中谷奈津さんには、別途送付しました。

ホール外の入り口付近には、徳島大学のマスコット『とくぼん』をあしらった記念写真用パネルが設置され、卒業生が友人や恩師を囲んで、記念撮影を行い、学び舎を名残惜しんでいました。



薬学部インフォメーションプラザ及びスタジオプラザの耐震天井改修工事について

インフォメーションプラザ及びスタジオプラザにおいて、令和2年9月より耐震天井改修工事を行いました。

主に大空間の天井の耐震化、ガラス部分への飛散防止フィルム貼付を行いました。

また、老朽化していたインフォメーションプラザの空調機器の更新、雨漏りにより劣化が激しかったスタジオプラザの床の貼り替えも併せて行いました。

スタジオプラザでは、今後、新型コロナウイルス感染症対策で対面授業などに利用することも考慮し、換気システムも導入しました。

工事期間は令和3年3月までかかり、その間皆さんに不便をおかけしましたが、新年度は一新したインフォメーションプラザ及びスタジオプラザで迎えております。



シーリングファンから
より空調効率をアップさせるエコシルフィへ
新しくなった空気循環システム



対面授業時に利用できる換気システム



落ち着いたトーンのスタジオプラザの床

学生の活躍

■ 博士後期課程の長期インターンシップ



生物有機化学分野 博士後期課程 3年

太田 雅史

Ota Masashi

私 は令和2年2月から3月までの1ヶ月間、核酸自動合成機を製作している日本テクノサービス株式会

社（茨城県牛久市）への長期インターンシップを経験しました。現在、私は大学院で核酸医薬を志向した人工核酸の開発研究を行なっています。核酸自動合成機は人工核酸の合成に不可欠ですが、本機は専門性が高く合成条件に合わせたカスタマイズ等も困難となっていました。そこで、私は中国四国地方を中心とした次世代教育者プログラム「未来を開く地方協奏プラットフォーム（HIRAKU）」のインターンシップ支援事業に応募し、その支援のもと核酸自動合成機の扱いに習熟する機会を得ました。インターン期間中、機械の組み立てやメソッドの構築といった自分の専門とは離れた作業を

こなしましたが、新たな創薬モデルとして核酸医薬が世界的に注目されている中、その基盤技術である核酸自動合成機による核酸合成を自在に行える技術を身につけたことは大学院卒業後も私の大きな武器になると感じています。HIRAKUを活用することで、博士後期課程の学生は様々な企業や研究機関でインターンシップが行えます。新型コロナによる状況が落ち着いた後、この制度を活用することを強くお勧めします。未筆ではございますが本インターンシップの実現に協力して頂いた企業、大学関係者の皆様に改めて御礼申し上げます。

■ Peer Communication Club



薬学部薬学科3年

山本 瞳

Yamamoto Hitomi

私 たち薬学部 Peer Communication Club は現在、16名が所属しており、普段は水曜日の昼休みに、

英語で楽しく喋ることを目標に、活動を行なっています。

部員は、英語が好きな人もそうでない人も所属しており、毎回いい雰囲気の中で楽しく活動しています。ふらっときてちょっとしゃべると、気づけばいつも12時45分になっていて、5・6限目の授業に向かうというのがいつもの流れです。

飲み会や大会などはなく、先輩後輩という垣根を超えて仲が良いです。この自由でアットホームな空気が、いい意味で、同好会という感じがしていて私は好きです。

昨年度は新型コロナウイルスのた

め、活動が禁止されている期間もあり、寂しかったです。今年度は、コロナが収まって前のようにマスクもソーシャルディスタンスもなしで、活動できるようになることを願っています。

まだ、新歓活動をできていないのでどうなるかわかりませんが、新入生がたくさん入ってくれたら嬉しいです。もちろん、2年生以上も今からの入部大歓迎です。

最後になりますが、薬学部 Peer Communication Club の活動を支援してくださっている方々、いつもありがとうございます。今後とも何卒よろしく願い申し上げます。

サークル紹介

薬学部行事予定

令和3年7月～令和4年3月

令和3年

8月1日(日)～31日(火)	夏季休業
8月上旬予定	オープンキャンパス
10月1日(金)	後期授業開始
10月23日(土)～24日(日)	大学祭(蔵本祭)
11月2日(火)	開学記念日
11月27日(土)	薬学共用試験 OSCE(予定)
12月17日(金)	薬学共用試験 CBT(予定)

12月25日(土)～1月7日(金) 冬季休業

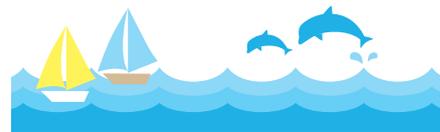
令和4年

1月15日(土)～16日(日)	大学入学共通テスト
2月25日(金)～26日(土)	一般入試(前期日程)
3月12日(土)	一般入試(後期日程)
3月23日(水)	卒業式・修了式
3月25日(金)～31日(木)	学年末休業

薬学部関連ニュース

教員の異動

令和3年3月31日付退職 衛生薬学分野 福田 達也 助教
 令和3年4月1日付採用 衛生薬学分野 大園 瑞音 助教
 令和3年5月1日付採用 医薬品病態生化学分野 片山 将一 助教



学会賞等受賞

【教員の受賞】

■日本分析化学会フローインジェクション分析学術賞

受賞者：竹内 政樹 准教授
 受賞年月日：2020年12月2日
 表彰団体名：日本分析化学会
 受賞内容：流れ系を用いる分離・濃縮モジュールの創出と物質循環の可視化

■康楽賞

受賞者：柏田 良樹 教授
 受賞年月日：2021年2月9日
 表彰団体名：公益財団法人康楽会
 受賞内容：研究成果

■日本薬学会奨励賞

受賞者：清水 太郎 特任助教
 受賞年月日：2021年5月14日
 表彰団体名：公益社団法人日本薬学会
 受賞内容：ナノ粒子に対する免疫応答を逆手に取ったワクチン開発

■タケル&アヤ・ヒグチ記念賞

受賞者：小暮 健太郎 教授
 受賞年月日：2021年5月14日
 表彰団体名：日本薬学会
 受賞内容：薬剤学・製剤学分野における研究の業績

■2020 Highly Cited Review Award for Biological and Pharmaceutical Bulletin

受賞者：石田 竜弘 教授
 受賞年月日：2021年5月
 表彰団体名：公益社団法人日本薬学会
 受賞内容：Liposomal Delivery Systems: Design Optimization and Current Applications

【学生の受賞】 (学年は受賞時)

■Hot Article Award Analytical Sciences

受賞者：柿内 直哉 (D3)*
 受賞年月日：2021年1月10日
 受賞内容：Inner Product of RGB Unit Vectors for Simple and Versatile Detection of Color Transition

■康楽賞

受賞者：森 友里乃 (B6)*、三竿 顕也 (B6)*、丹羽 晃悠 (D3)*、桐山 慧 (M2)*
 受賞年月日：2021年2月9日
 表彰団体名：公益財団法人康楽会
 受賞内容：研究成果

■長井賞

受賞者：森崎 実友 (B6)*、光村 豊 (B4)*
 受賞年月日：2021年3月23日
 表彰団体名：徳島大学薬学部

■学部長特別表彰 [昨年度からの延期]

受賞者：多田 篤史 (B6)*、又吉 かれん (B6)*、森崎 実友 (B6)*
 受賞年月日：2021年3月23日

■日本薬学会中国四国支部学生発表奨励賞

受賞者：武井 みのり (B6)*、城 裕己 (M2)*、山崎 航太 (M1)*
 受賞年月日：2021年3月23日
 表彰団体名：日本薬学会中国四国支部

■日本薬学会第141年会学生優秀発表賞 (口頭発表の部)

- 受賞者：川口 桂乃 (D1)*
 受賞内容：脾臓B細胞上の補体受容体を介した抗原送達法を利用する新規細胞免疫療法の開発
- 受賞者：角南 尚哉 (B5)*
 受賞内容：イオン液体を用いた GLP-1 受容体作動薬の腸管吸収性検討

○受賞者：小林 大志朗 (D1)*
 受賞内容：S-保護システインスルホキシドを利用した Cys-Trp チオエーテル結合

○受賞者：中村 天太 (M2)*
 受賞内容：Chippine型アルカロイド Tronocarpine の短工程全合成

○受賞者：篠田 知果 (M2)*
 受賞内容：エンドグリコシダーゼを用いたトランスジェニックカイコ由来ヒト α -L-iduronidase の N 型糖鎖改変

受賞年月日：2021年4月2日
 表彰団体名：日本薬学会

■日本薬学会第141年会学生優秀発表賞 (ポスター発表の部)

受賞者：橋田 芽依 薬学部 (B6)*
 受賞年月日：2021年4月2日
 表彰団体名：日本薬学会
 受賞内容：近接依存性標識法によるミトコンドリア Ca ユニポーターの新規制御

■日本薬学会永井財団大学院学生スカラシップ

○受賞者：川口 桂乃 (D1)*
 受賞内容：細胞ワクチンへの応用を目指した補体受容体標的化キャリアを用いる新規 B 細胞抗原刺激法の確立

○受賞者：米田 晋太郎 (M2)*
 受賞内容：脳虚血/再灌流障害の治療を目指した粒子制御リソソーム化 FK506 の構築

受賞年月日：2021年5月14日
 表彰団体名：公益社団法人日本薬学会

■SNPEE2021 優秀発表者賞

受賞者：川口 桂乃 (D1)*

受賞年月日：2021年5月14日
 表彰団体名：公益社団法人日本薬学会
 受賞内容：効果的な細胞免疫療法の開発に向けた B 細胞への新規抗原刺激法の有用性評価

■日本薬学会永井財団学部学生七つ星薬師奨励賞

○受賞者：赤木 俊介 (B6)*
 受賞内容：物性の異なるナノフィブリル化バクテリアセルロースを用いた新規 PTX 製剤の開発と腹膜播種治療評価

○受賞者：木下 暢 (B6)*
 受賞内容：網羅的プロテオミクスを用いたヒト脳毛細血管内皮細胞への内在化活性を示す脳転移性メラノーマ SK-Mel-28 由来細胞外小胞の特性解析

○受賞者：道上 巧基 (B6)*
 受賞内容：サルコペニア治療を目指したイオントフォレシスによる非侵襲的なペプチドの骨格筋送達

受賞年月日：2021年5月14日
 表彰団体名：公益社団法人日本薬学会

■日本薬学会第36年会最優秀発表者賞

受賞者：瀨 眞吾 (D4)*
 受賞年月日：2021年5月15日
 表彰団体名：公益社団法人日本薬学会
 受賞内容：アルブミン結合型バクリタキセル製剤 Abraxane® の変性アルブミン受容体を介した薬物輸送メカニズム

※注釈：氏名の右横の () 内のアルファベットは、
 B = 学部生、M = 博士前期課程・博士課程、
 D = 博士後期課程・博士課程を指します。

学部等支援基金(薬学部) ご寄附のお願い

薬学部は、職種にかかわらず多様な薬学領域の様々な分野に対応可能な人材「インタラクティブ YAKUGAKUJIN」育成を教育理念とし、薬学の新たな未来の創造に貢献するため、教育研究活動を推進しています。このような取組を発展させるため、薬学部・薬科学教育部における教育研究、国際交流及び社会貢献等の様々な活動に基金を活用させていただく予定です。皆さまからの

ご理解、ご支援を賜りますようよろしくお願い申し上げます。

- お申込み方法等、詳しくはホームページをご覧ください。



<https://www.tokushima-u.ac.jp/contribution/foundation/>

発行：徳島大学
 編集：薬学部広報委員会
 広報委員：難波康祐、藤野裕道、植野 哲、稲垣 舞、北池秀次

URL：https://www.tokushima-u.ac.jp/ph/
 〒770-8505 徳島市庄町1丁目78-1
 徳島大学蔵本事務部薬学部事務課総務係
 E-mail：isysoumu3k@tokushima-u.ac.jp

●皆様のご意見、ご要望、エッセイ、写真、絵画、漫画などご投稿を歓迎します。どしどしご応募くださいますようお願いいたします。次回の発行は、令和3年12月頃を予定しております。